

## 教育原理⑫

「特別な支援を必要とするお子さんと保護者を支えるために」



令和4年6月20日（月）

八戸学院大学短期大学部 幼児保育学科

# 2つのテーマについて

今日はディスカッションが中心となります。

- 第1部 「子ども・保護者と出会う時」
- 第2部 「子どもの理解と支援」

以上の、2部構成とし、区切って進めます。



# 1. お子さんと保護者さんと出会う時

- 保育所、認定こども園、幼稚園は、子どもたちが初めて出会う社会です。

→ 家庭とは様々違う、この「園」という社会に出会った時に、困ってしまっているお子さんの中にはいるのではないのでしょうか？



1. お子さんと保護者さんと出会う時

■ 例えば...



落ち着きがない



こだわりが強い



話すことが苦手・発音が不明瞭



## 1. お子さんと保護者さんと出会う時

- こうしたお子さんたちと出会った時に、保育者がしていることは、どのようなことでしょうか。

→ こんなことをしているはずです！



観察・実態把握



園内での情報共有



支援の実施



## 1. お子さんと保護者さんと出会う時

- そして、もう一つ、保育者として果たすべき役割は…、



→保護者さんと一緒に、「そのお子さん」のことをわかりあい、支援について考えることです。



## 1. お子さんと保護者さんと出会う時

- 私からのフィードバックです。
- 特別な支援を必要とするお子さんと出合い、捉える時に、



できないこと・苦手なこと

と同時に、



できていること・得意なこと



## 1. お子さんと保護者さんと出会う時

- 保育者の得意なことは…、
- その子のできていることを丁寧に捉え、認める関わりをする。
- その子の思いに寄り添い、共感的に関わる。  
＝ 評価的な見方をもちつつ、共感的に関わる。

（「気になる子の視点から保育を見直す！」2015年 久保山茂樹）



- そうした関わりを展開するためには、
- 園長先生、主任の先生をはじめとする同僚の先生方と、Aさんの捉えを話し合うこと。  
→ 話すことで、自分の考えていること、思っていることに気づくことも可能になります。（自己知覚）
- Aさんの思いを、保育者として能動的に思い続けること。

などが求められます！



## 2. 子どもの理解と支援

- 第2部では、子どもの姿をどのように捉えるか、またその子どもへの具体的な支援について考え合う時間にします。
- 二つのケースについて、お示しします。



- 私からのフィードバックです。
- どのような特性を持つお子さんに対しても、  
「共感的に関わる」ことは、とても有効だと考えます！



- 行動には必ず原因がある！
- 突然怒ってしまうBさんですが、担任の先生とお話をしていたら、「午後に怒り出すことが多い。」ことに気づきました。体をたくさん動かして遊ぶBさんですので、「疲れ」もその原因として考えられました。
- また、観察していると、Bさんが怒り出す前後で、「自分にとってマイナスなことを言われた。」「咎められた。」「笑われていると感じた。」といったことが推察されました。



- その原因を、「能動的に思い」つつ、共感的に関わる！
- 「そうかあ、疲れたよね。ちょっと休もうか。」
- 「そう言われて、悲しい気持ちになったよね。先生も同じ気持ちになるよ、そう言われたらね。」

→自分の気持ちを理解してもらえる安心感が積み重なりつつ、保育者との信頼関係につながると考えます。



- 私からのフィードバックPart2です。
- Bさんも、Cさんも、実は自分の特性や行動に、「自分自身も困っている」ということを、保育者は理解したいですね。



■ 東田直樹さんの著書「自閉症の僕が跳びはねる理由」（2018年）より

■ どうしてこだわるのですか？

僕たちだって好きでやっているわけではないのですが、やらないと、いてもたってもいられないのです。

自分がこだわっていることをやると少しだけ落ち着きます。こだわりをみんなに注意されたり、やめさせられたりするたび、僕はとても情けなくなります。こだわりなんてやりたくないのに、やってしまう自分がいやなのです。



もし、人に迷惑をかけるこだわりをやっているのなら、なんとかしてすぐにやめさせて下さい。人に迷惑をかけて一番悩んでいるのは、自閉症の本人自身なのでありますから。

(中略)

こだわりをやめさせられると、初めは苦しくて大騒ぎしますが、やがて少しずつ慣れていきます。

それまで、僕たちと一緒に頑張って欲しいのです。



- 「自分は自分で良い」と思えるような支援を。

乳幼児期の支援の最大のポイントはココではないでしょうか？

「何かができるようになる」ことも、その自己肯定感を高める要素にはなるかも知れませんが、もっと根本的なところで、子どもたちにそう思わせたいと考えます。



- 「自分は自分で良い」と思えるような支援を。

温かなまなざしで見守られ、その安心感を感じながら一緒に頑張ることが、そうした心情につながると考えます。

そして子どもたちは、この自己肯定感を土台に、その先の人生へ踏み出していくでしょう。

